札幌学院大学 Sapporo Gakuin University 学術機関リポジトリ

タイトル	優先コミュニケーション・チャンネルの心理学的重要性 ： 関連性評定質的分析を用いた検討
著者	葛西，俊治
引用	札幌学院大学人文学会紀要 = Journal of the Society of Humanities(90): 47-59
発行日	2011-10
URL	http://hdl.handle.net/10742/1522

札幌学院大学総合研究所　〒069-8555　北海道江別市文京台11番地　電話：011-386-8111

《論　文》

優先コミュニケーション・チャンネルの心理学的重要性
― 関連性評定質的分析を用いた検討 ―

葛　西　俊　治

要　約

対話的状況における非言語的要素の重要性，優先的な感覚モードとコミュニケーション・チャンネルの重要性はM.エリクソンによる画期的な催眠療法において示された。優先情報チャンネルの多様性と個人差に関する「青い湖・白いヨット」心的イメージ課題による研究では，数量化Ⅲ類を用いて構成された関連性評定質的分析によって，1）体験内容の直接性 vs.間接性，2）非視覚モード vs.視覚的モード，3）孤立 vs.囲まれ感，4）場所的な私 vs.内的な思い，の4軸が見いだされ，優先コミュニケーション・チャンネルの個人差と多様性があらためて指摘された。情報チャンネルのそうした多様性のために，対話状況においてコミュニケーション・チャンネルにミスマッチが起きる可能性について議論が行われた。

キーワード：情報チャンネル，エリクソン催眠，林の数量化理論Ⅲ類

はじめに

対話的なコミュニケーションは単に言語的に行われるだけではなく，非言語的な要素や手がかりとともに了解される重層性から成り立っている。たとえば，「こんにちわ」という発話がそのまま文字化されてしまえば日中の挨拶となるだけだが，実際は発声がかすれていたり言い淀んでいたり，あるいは発話と同時に身じろぎや目配せや何らかのジェスチャーを伴うことにより，聞き手は「コンニチワ」という音と言葉の意味のみならず，発話に伴う身体由来の要素とともに発話者の意図そのものも了解しようとする。したがって，発話という言語的コミュニケーションは，実際には様々な非言語的要素と重なりつつ提示されることから，本質的に言語的かつ非言語的な関わりとして位置づけられる必要がある。それと同時に，身体由来の非言語的な要素のうちのどのような要素に優先的に反応するのかという，聞き手側の指向性についても考慮する必要が生じる。いわゆる，優先コミュニケーション・チャンネル（predominant

本研究は札幌学院大学2006年度研究促進奨励金による補助を受けた。本論文の一部は日本人間性心理学会第29回大会（2010）にて発表された。

communication channel）とは，視覚的情報，聴覚的情報，体感的情報，嗅覚味覚的情報などの感覚モードのうち，聞き手によってどれが優先的に用いられ，その結果，どの感覚モードを経てきた情報が優先的に取り込まれるかに関わっている。本論文では非言語的要素の影響を扱う身体心理的アプローチや身体心理療法の前段階として，優先コミュニケーション・チャンネルおよび優先情報チャンネルの多様性を指摘し議論することを目的とする。なお，対話的状況においては「優先的なコミュニケーション・チャンネル」と表記し，個々人の内的情報処理に関わる側面については「優先的な情報チャンネル predominant information channel」と一応の区別を行って表記し，いずれも多様な感覚モードを含むものとする。なお，その際の優先的チャンネルとは，五感に関わる感覚器官に限定されず，場合によっては内的情報処理過程として例えば記憶優先型，概念優先型，論理優先型などと呼ばれるような認知思考過程における優先性が関わる場合も含んでいる。これは，感覚・知覚・認知・思考・記憶・論理などの内的情報処理過程が必ずしも明確に分離されるとは限られないことによる。

催眠誘導と優先的な情報チャンネル

アメリカの精神科医で催眠療法を一変させた Milton H. Erickson（1901-1980）[1]は，旧来の形式張った催眠誘導方式から，表面的には日常的な会話のようなやりとりの中で催眠誘導を行い，来談者や患者の主訴に関わる治療を明確に指向し，しばしば専門家にとっても理解困難な治療方法や認知行動変容への独自の方策によって治療を成功させたことから（uncommon therapy），「エリクソン催眠」と呼ばれるほどに催眠療法の世界を一変させた（以下 Erik Erickson と区別してM.エリクソンと表記）。その後，M.エリクソンの催眠療法についての研究が進み，彼の催眠療法の一部分を取り出して強調した形で「短期療法 brief therapy」「戦略的心理療法 strategic psychotherapy」「解決志向心理療法 solution-focused psychotherapy」「神経言語プログラミング NLP: Neuro Linguistic Programming」などのアプローチが輩出するに至った。本論で扱う優先コミュニケーション・チャンネルあるいは優先情報チャンネルは，当初は特に神経言語プログラミング[2]と呼ばれる領域において取り上げられていたが，その学問的側面については必ずしも十分とはいえないため言及は差し控える。ここでとりあえず把握しておくべき点は，催眠誘導においては対象者の優先コミュニケーション・チャンネルを見いだして，そのチャンネルに対してメッセージを届けなければ催眠誘導を効果的に行えないというM.エリクソンの基本的立場，である。たとえば視覚的情報に敏感な者に対して「外の風の音を聞いてみて下さい」といった聴覚モード的教示は的外れであって，むしろ「右側の灯りを注視して下さい」などの視覚的教示の方が効果的であろうし，座っている椅子の座面の堅さを気にしている体感型の者に対して「問題が起きた１年前のことを話して下さい」と記憶に働きかける教示もとりあえず的外れになりうるということである。

なお，個々人の優先情報チャンネルが眼球運動の方向や視線の向きと対応しているという記述が神経言語プログラミングに見いだされるが，そうした見解を否定する研究も存在している（Elich, M., Thompson, R. W., & Miller, L. ,1985）[(3)]。筆者の予備的研究においても，考え込んだり思い出そうとして思考や想起といった内的過程に集中している際に眼球がしばしば特定の方向を向くという現象が観察されるにしても，そうした眼球の動きと優先情報チャンネルとの対応はそれほど明確には見いだせていない。

また，優先感覚モードとして取り上げられてきた視覚型・聴覚型・体感型・記憶型・概念型などといった分類にしても，それぞれの感覚モードの実際の内容には個人差が認められるため，優先的なチャンネルを単純に何々型として分類するだけでは必ずしも十分ではない。こうした点に関連して明確にしておくべきことは，M.エリクソンが並外れた観察力・洞察力の持ち主であったこと，またそうした鋭い観察力・洞察力からの帰結として，人はそれぞれに違っているので同じセラピーの方法が通用しないと述べていることである。つまり，神経言語プログラミングにしても筆者による予備的な研究にしても，定型的な反応や一般的な傾向といった大まかで蓋然的な基準での把握を試みているのに対して，M.エリクソンはきわめて微細で個別的な反応の中から優先的なチャンネルとその詳細を的確に見つけ出していたと考えられる点である。車いすに座って来談者と向き合っていたM.エリクソンは相手の首筋の微細な動きから脈拍数をカウントしていたとか，女性の患者がM.エリクソンに対して自分の問題が分かるかどうかと問いかけたとき，「はい分かります，ミスター」と答えて女装した男性であることを即座に見抜いたこと（男性と女性の肘の動かし方の違いから判断したとされている）等々，鋭い観察力についてのエピソードが多々残されている。そうした的確な観察に基づく優先チャンネルの同定といった本質的なテーマに先だって，本論文では様々な感覚チャンネルあるいは情報処理チャンネルが次のような課題においても見いだされることを示し，優先的な感覚モードや情報チャンネルについての議論を進めるための手かがりとしたい。

「青い湖・白いヨット」課題

現代は視覚モード偏重の時代であり，様々な情報がこれほどまでに視覚優位に生産され消費される時代はかつてなかったといえる。そこで，視覚的なイメージに関わる「青い湖・白いヨット」課題を提示することにより，視覚的な反応を捉えるとともに視覚型以外の感覚モードがどの程度出現するのかを把握するための基礎的研究を行ってきた。「青い湖・白いヨット」課題とは，被験者に対して「青い湖をイメージしてください」と教示しその後に「湖に浮かぶ白いヨットをイメージしてください」と教示し，そうした指示によってどのようなイメージや体験が起きたかについて報告を求めるものである。これまでおおよそ千人ほどに同課題を提示し反応を得てくる中で，優先情報チャンネルの相違と個人差の大きさを見いだしてきた。以下では，

2010年に発表した内容[4]を中心に解説を加える。なお，この発表では自由記述内容の分析法として，川喜多二郎によるKJ法と林知己夫による数量化理論Ⅲ類を組み合わせた関連性評定質的分析[5]を用いた点が特徴といえる。質的分析法としてしばしば用いられているグラウンデッド・セオリー分析（Grounded Theory Analysis）や修正版グラウンデッド・セオリー分析（M-GTA），現象学的解釈学的分析（Interpretive Phenomenologial Analysis）と比較すると，a）抽象度をあまり高くすることなく質的分析が行えること，b）数量化理論Ⅲ類を用いることによりカテゴリー・ラベルを多次元的空間に配置する因子分析的な軸が得られこと，という特長をもつ。

【課題の実施】同課題の実施形態は様々であるが，大半はカーペット敷きの部屋にてストレッチなどの簡単な準備体操を行った後に仰向けに横たわった状態で実施している。ストレッチなどの準備体操により身体的感覚の活性化を図るのは，課題そのものが視覚的イメージを用いるため，優先情報チャンネルが視覚に偏る傾向を緩和することを狙いとしている。また，仰向けに横たわった状態で教示を与えるのは，周囲の他者が目に入ることに依る影響を軽減して注意集中がしやすくなるためである。仰向けで横たわっている被験者に「青い湖をイメージしてください」と二度ゆっくりと教示し，約30秒後に「湖に浮かぶ白いヨットをイメージしてください」と二度ゆっくりと教示した。その後に体験内容の自由記述を求めた。被験者は大学三年生：男子学生５名，女子学生12名。

【分析】

関連性評定質的分析を用いて以下のように分析を行った。全員の自由記述内容（Ｂ５用紙，平均6.41行）を主に文章単位にカード化し79枚のカード（c01～c79）を得た。KJ法を基本としてカードのカテゴリー化・ラベル付けそして空間配置を行った。カードが集まってグループを構成する最初の段階をレベル１（L1_1～L1_23まで23個のグループ）と呼ぶと，それを含むグループをレベル２（L2_1～L2_11の11個のグループ），そのレベル２のグループを含むグループをレベル３（L3_1～L3_7の７個のグループ），さらにレベル４（L4_1～L3_3の３個のグループ），レベル５（L5_1の１個のグループ），そして，最上位でレベル５（L6_1の１個のグループ）までに集約された。

最終的な上位ラベルとしては，表1-1にあるように「L5_1 青い大きな湖が見通せてきらきらした湖面と空の雲が見える」と，表1-2にある「L4_2 風音や鳥の声がして湿った森の中にぽっかりと湖がある」，表1-3にある「L6_1 しっかりと湖を眼にしていたりあるいは体感もなく第三者的に，夢を見ているような感じ」，そして表1-4にある「L3_7 地元や海外など実際の湖をイメージしたり必死に考えて想像した」と「L2_11 人は誰もおらずさびしいものだ」であった。これらの五つのラベルにより自由記述内容がおおむねカバーされたことになる（どこにも併合されない独立カードを除外）。

表1－1

レベル5	レベル4	レベル3	レベル2	レベル1	カード
L5-1　青い大きな湖が向こう岸などまで見通せてきらきらした湖面と空の雲が浮かぶ	L4-1　澱い青のきれいな湖で湖面はキラキラ輝き雲が浮かぶ	L3-2　湖面がキラキラとして空に浮かぶ	L2-4　天気は明るく晴れて湖面がキラキラしている	L1-10 湖面に光が反射してキラキラしている	快晴で水面に光が反射しているのが想像できた。
					湖はキラキラしていた。
					全体的にキラキラしているイメージ。
				L1-08 天気は晴れていて明るい	天気は晴れていた。
					天気は快晴。
					天気は晴れていて。
					天気は晴れで。
					晴れていて明るい。
				L1-11 少し雲があってゆっくり動くものもある	雲は少しあったような気がする。
					雲も少しあった。
					雲もヨットと同じく右から左へユックリ動いた。
				L1-09 くすんだ澱い青だったりきれいな水の色の湖です	きれいな青い湖が。
					水はくすんでいて静か。
					コバルトブルーの湖を想像しました。
					少しくすんだ澱い青の湖を想像しました。
		L3-4　大きな湖で見通しが良く向こう岸や島や奥に山が見える	L2-9　対岸がボンヤリ見えるなど大きな湖で見通しがよい	L1-01 対岸がボンヤリ見えるなど大きな湖です	想像した湖は広くて大きい湖で対岸がボンヤリ見えました。
					支笏湖をイメージしたような大きい湖だった。
					とても大きくて。
					わりと大きめの湖。
					結構，広めでした。
				C01	山の中にはなく，見通しがよい場所だった。
			L2-10 湖のまん中の島や向こう岸や，奥に山が見える	C02 C03 C04	向こう岸はつながっていた。
					湖の奥には，山があった。
					まん中に小さい島があった。

表1－2

レベル4	レベル3	レベル2	レベル1	カード
L4-2　風音や鳥の声がして湿った森の中にぽっかりと湖がある	L3-3　少し湿った森の匂い，風音，鳥の声，自然の中にいる感じ	L2-06 少し暗く湿った土，葉っぱなど，森の匂いがする	L1-07 森の中などで周りは少し暗い	森の中なので少し暗い。
				周りは少し暗いようだった。
			c5	土の匂い？手で握るとちょっと冷たい感じがして。
			L1-16 湿っているような土，葉っぱとか森の匂いがした	あとは少し湿っているような匂い。
				森の匂いというか，木の皮が湿っているような匂いと，水の匂い？土が湿っているようだ。
				匂いは森林の中にいる土とか葉っぱの匂いがした。
				水を含んだ少し黒っぽい土の匂い。
		L2-08 そよ風の音，鳥の声がして自然の中にいる	L1-12 そよ風で水面が波打っている	風はそよ風って感じだった。
				風はあったと思う。しかし，周りの緑はなびいていなかった。
				風がそよそよと吹いていて湖の表面が波打っている。
			L1-14 木が揺れる風音，鳥の声で自然の中にいる感じ	木が揺れる音がサワサワ。
				声は聞こえず，風の音と匂いがした。
				音は鳥の声とか自然の中にいるような感じ。
		c6		花はない。
	L3-5　開けていず，森の中にぽっかり湖があり大きくはない		L1-02 開けているわけではなく湖は大きくない	そんなに大きくない。
				湖自体はそれほど大きくは感じなかった。
				開けているわけではなく，せまい。
				湖は山の中にあり。
		L2-5　周りには木があり，森林の中にぽっかりとある湖です	L1-04 森の中にぽっかりある感じの湖を思い浮かべた	最初に森の中にぽつんとある湖を思い浮かべた。
				森林の中にぽっかり急に現れた感じの湖。
				湖の周りに森があることも想像していた。
			L1-05 森林の中にある	森林の中にあって。
				周りに緑があった。
				湖の周りには，緑が多く。
				森林の中に。
				森林の中にあった。
			L1-06 周りには木々の緑がある	周りに木があった。
				木とかは深い緑色。
				周りには木が少しある。

表1－3

レベル6	レベル5	レベル4	レベル3	レベル2	レベル1	カード
L6-1 しっかりと湖を眼にしていたり，あるいは第三者的に体感もなく，夢を見ているような感じ	L5-1 第三者として見ていて体感がなかったり，自分がいるのか曖昧で夢を見ているような感じがした	L4-3 第三者として見ていて風や波，音も匂いもしない	L3-1 第三者的目線で画像を見ていた	L2-01 映像を見ている感じだが，写真的なこともある	c7	私が想像した湖は，映像ではなく写真的なものだった。
					L1-19 写真ではなく映像を見ている感じだ	写真というよりも映像に近かったです。
						写真とかではなく。
						全体のイメージとしては，映像（ビデオ，2D）を見ているような。
						自分自身が見ているというよりも，映画やTVの中の映像をキレイに見ている感覚でした。
						その風景を遠くから見ている感じで，映像を見ている感じがした。
				c8		自分の目線だったが，その場所に自分はいなくて，テレビや絵本を見るような，第三者的目線だった。
				L2-07 風，波もなく音も匂いもしない	L1-13 風はなく，波も立っていない	その場所は風が吹いておらず，水面に波が立っていませんでした。
						想像した中で風などを感じることはなく。
					L1-15 音声（人・動物・風）や匂いはしなかった	人物・におい・音声などは特になし。
						動物の声や風の音はなかった。
						風も音も匂いもしなかった。
						風や匂いはなくて，音などもしなかった。
						音・声はなく風も匂いもなかった。
						音声や匂いは感じていません。
					L1-21 自分がいるのか曖昧で夢を見ているようにふわふわした感じ	その場にいた気がするけれど。
						自分がいるのかさえ曖昧な感じであった。
						身体の感じは実際に湖にいる感じではなくて，夢を見ているようにフワフワしている感じがしてた。
			L3-6 湖の前やロッジの窓，あるいは車窓から湖を見ている	L2-02 湖のふちやロッジの窓から，目の前にある湖を見ていた	L1-18 湖のふちに立ったりロッジのまどか湖を見ていた	湖にふちに立って，ぼーっと眺めていた。
						森の中にロッジみたいに木の小屋がありそこから自分は窓の柵から青い湖を見ていた。
					c9	その後，ズームして湖が目の前にあった。
				c10		おそらく車窓からの眺め。

表1－4

レベル3	レベル2	レベル1	カード
L3-7　地元や海外など実際の湖をイメージしたり，必死に考えて想像した	L2-03 地元や行ったことのある湖や海外の湖をイメージした	L1-17 地元や行ったことのある湖や，そこでマラソンしたコースなども思い浮かんだ	自分が友達や家族と湖に行ったことも思い出したりした。
			湖といわれて，地元にある湖が思い浮かびました。
			高校生のときにその周りをマラソンをしていたので，そのコースなどが湖の全体像の他に動画のように浮かびました。
		L1-22 日本やチェンマイ，北欧・欧米のような湖をイメージした	日本の湖をイメージしました。
			タイのチェンマイにある湖。
			例えるなら，北米とか北欧な感じで世界遺産とかになっていそうな所だった。
		L1-20 リアルな体験が思い出せず，必死に考えて想像した	リアルに体験した湖が思いだせず，創り出したものしか想像できなかった。
			考えるのに必死だったのは，湖なら周りに何があるのかということだった。とりあえず森のような木があるだろうと行った風に想像した。
	L2-11 人は誰もおらずさびしいものだ	L1-23 自分以外に誰もいない	自分以外に人は誰もいなかった。
			人はどこにもおらず。
		c11	それはさびしいものだ。
		c12	湖と白いヨットが意識の中で一つに定まらず，風景と簡単に絵に描いたようなものが交互に入れ替わるような感じがしてました。

こうしたカードとラベルの空間配置からカードとラベルの対応表を作成し，林の数量化理論Ⅲ類を用いて分析した（SPSS ver.16を使用。分析手法の詳細については文献5を参照のこと）。なお，カードとラベル対応表に基づく分析ではカード枚数とラベル数が多く固有値がかなり小さくなるため，レベル1のラベルをカードのようにみなして分析を行った（レベル1に該当する記述がない場合は，カードの内容をそのままレベル1のラベルとみなした）。数量化理論Ⅲ類による分析の結果，レベル1のラベルを除くすべてのラベルについてそのカテゴリー・スコアが得られた。そのうちカテゴリー・スコアの絶対値の大きいラベルを第Ⅰ軸から第Ⅳ軸までの図1・図2に示した（いずれも文献4からの引用）。図1の横軸が第Ⅰ軸，縦軸が第Ⅱ軸であり，図2の横軸が第Ⅲ軸，縦軸が第Ⅳ軸である。すべてのラベルを表示すると見づらいため，各軸のプラス側・マイナス側の絶対値の大きなラベルのみ表示されている。

【結果】

第Ⅰ軸はプラス側に「L4_1 澄い青のきれいな湖で湖面はキラキラ輝き雲が見える」が位置し，マイナス側に「L3_1 第三者的目線でイメージした画像を見ていた」が位置している（固有値0.26895）。このように，直接的な体験内容（L4_1）と内的イメージの注視（L3_1）とが

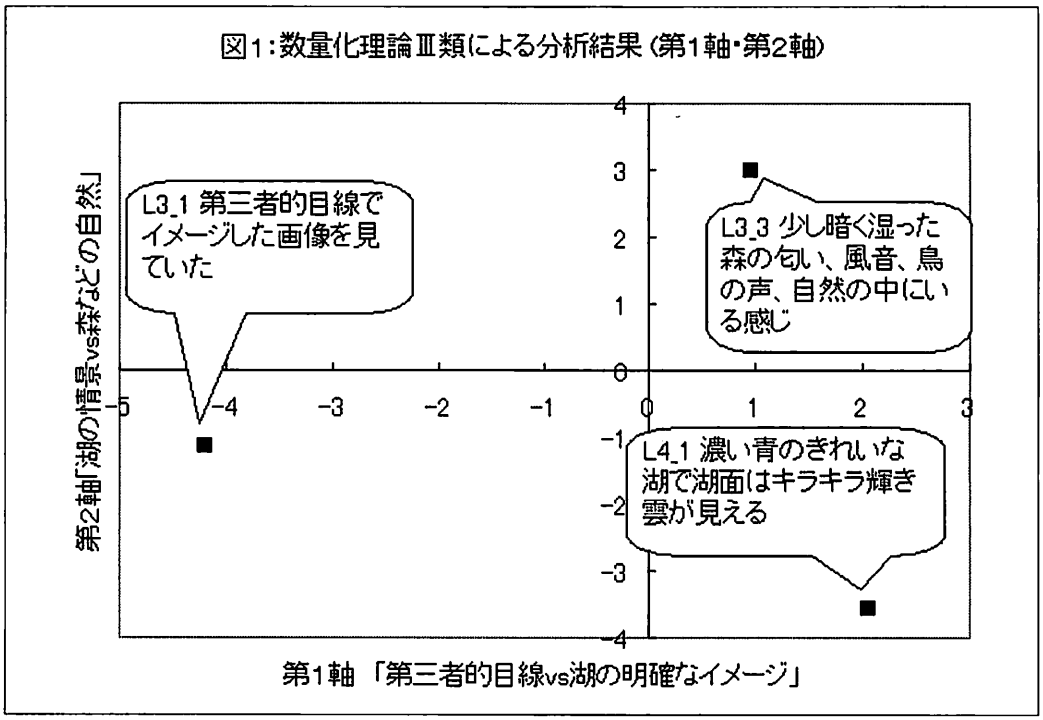

図1

（出典：日本人間性心理学会第29回大会発表論文集，208-209，2010）

対比されていると考えられることから，第Ⅰ軸は「体験内容の直接性・間接性」を表す軸と解釈される。

第Ⅱ軸はプラス側に「L3_3 少し暗く湿った森の匂い，風音，鳥の声，自然の中にいる感じ」が位置し，マイナス側には「L4_1 濃い青のきれいな湖で湖面はキラキラ輝き雲が見える」が位置している（固有値0.20293）。このように，嗅覚や聴覚や体感的な体験（L3_3）と直接的な視覚的な体験（L4_1）とが対比されていることから，第Ⅱ軸は「非視覚モードと視覚的モード」を表す軸と解釈される。

第Ⅲ軸は，プラス側に「L2_11 人は誰もおらずさびしいものだ」が位置し，マイナス側に「L3_3 少し暗く湿った森の匂い，風音，鳥の声，自然の中にいる感じ」が位置している（固有値0.14236）。第Ⅲ軸上の数値がプラス側に大きく偏っているためラベルL2_11の単極的な構造とも考えられるが，誰も居ない所に一人で居るという感覚（L2_11）と体感的に濃い世界に取り囲まれている感覚（L3_3）とが対比されていることから，第Ⅲ軸は「孤立と囲まれ感」を表す軸と解釈される。

第Ⅳ軸は，プラス側に「L2_11 人は誰もおらずさびしいものだ」と「L3_1 第三者的目線でイメージした画像を見ていた」が位置し，マイナス側には「L3_6 湖のふちやロッジの窓，車

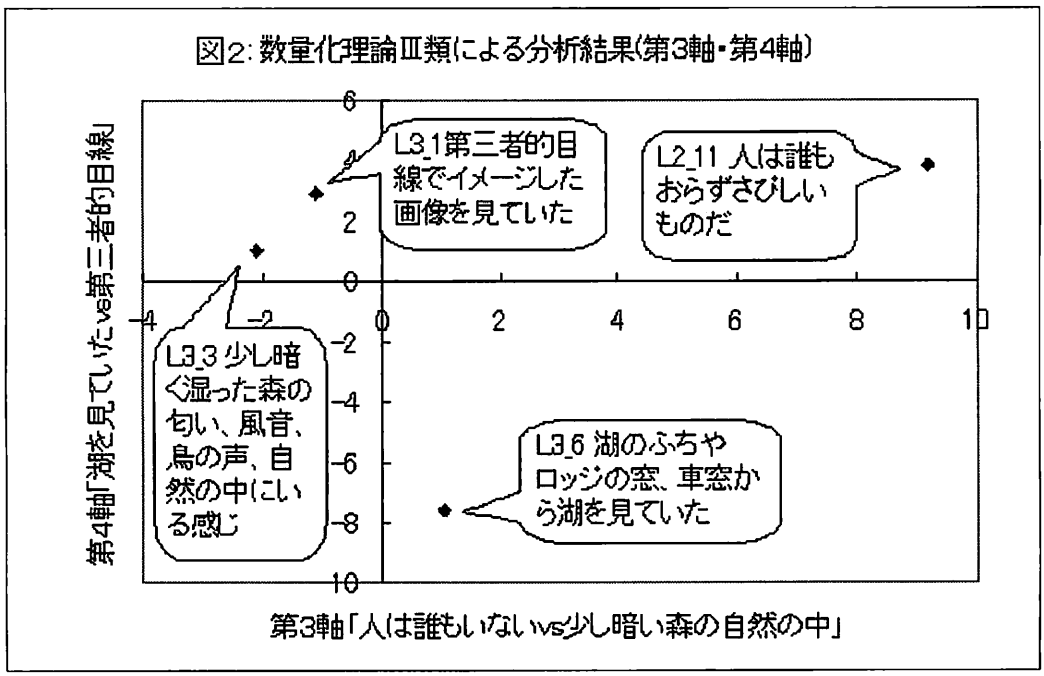

図2

（出典：日本人間性心理学会第29回大会発表論文集，208-209，2010）

窓から湖を見ていた」が位置している（固有値0.11027）。この第Ⅳ軸もマイナス側への偏りが大きいため単極的な軸とも考えられ，また，固有値もかなり小さいので解釈可能性が低くなっていると思われるが，視点と居場所の明確さ（L3_6）と内的な記述（L2_11およびL3_1）とが対比されているとして，第Ⅳ軸は「場所的な私 vs.内的な思い」を表す軸と解釈される。

このように，数量化理論Ⅲ類を用いる関連性評定質的分析によって，感覚モードなどのいくつかの側面がⅠ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳの四つの軸を通じて把握されたと言える。

（なお，数量化理論Ⅲ類によって得られる軸は因子分析における軸とは質的に異なる点がある。後者は相関係数行列に基づく分析手法であり，相関の絶対値の高い項目が軸の両極に振り分けられてその軸（次元）は２項対比的となるため軸の意味づけと解釈が比較的容易である。それに対して，カードとラベルの対応表（1-0からなるデータ行列）を用いる数量化理論Ⅲ類では，対応表上で近接しない項目が軸の両端へと相互に離れて位置付けられるため，軸の二項対比的な意味での一次元性が得られるとは限らない。そのため軸の意味づけと解釈がしばしば困難となるが，経験的にいえば固有値が大きい第Ⅰ軸，第Ⅱ軸などではおおむね一次元的な解釈が可能となることが多い。）

従来の質的分析法では，表1-1から表1-4に示されているような高次のラベルおよびカテゴリーの抽出が主な目的であり，得られたカテゴリーに基づいた解釈や洞察は研究者に委ねられ

ている。それに対して数量化理論Ⅲ類による分析では，必ずしも最高次のラベルが軸の両極に位置するのではなく，中程度の抽象度の高さのラベル・カテゴリーが軸の極に位置することがあるため，研究者があらかじめ想定していなかった対比が得られることがある。従来の質的分析法では，高次のラベル・カテゴリーに至るにつれて研究対象の構造が単純になるだけではなく，研究以前にも想定されるような常識的な理解へとしばしば収斂しがちである。上に示した第Ⅱ軸の「非視覚モードと視覚的モード」という対比は予想されていた通りであるが，それに対して第Ⅰ軸「体験内容の直接性・間接性」，第Ⅲ軸の「孤立と囲まれ感」，第Ⅳ軸「場所的な私 vs.内的な思い」はいずれも単なる情報チャンネルの把握といった当初のねらいを超えて，感覚についての極めて微細な構造を指し示しているといえる。

なお，以上の分析とは別の体験内容チェックリストにおいて，指定した反応の度数を数え上げている。表２（文献４からの引用）に体験内容チェックリストとカウントされた度数を示す。

項目(a)「視線目線移動または場所空間位置」は「向こう岸には・右から左へ・湖の周りに…」といった視線移動や場所など空間的な記述を数え上げている。また，項目(b)「運動動作及びその形容」は「ぽっかり・現れた・行ったこと・揺れて…」といった動きとその形容の記述の度数を数え上げている。この項目(a)(b)は視覚的表現であるが，そこに視線移動などの身体性や体感的要素が含まれていると考えられるため，体感型の副次的な指標としての可能性を確認するために用いられた。項目(c)「感じる思うなど心的内容記述」は「感じた・体験した・イメージした・想像した…」といった内面的な表現についての記述を数え上げている。項目(d)(e)(f)も同様に身体的要素を副次的に含む指標として用いられた。結論として，表２から明らかなように，視覚的イメージ課題における体感的記述の出現が確認されたといえる。ここで，表１の三つの項目(a)(b)(c)の出現頻度間にはほとんど相関はなく（データ数が少なく検定力が低いため暫定的な把握），「視覚的」と見なされる体験内容（a と b）であっても被験者間でかなり異なっていること，また，湖などの対象への直接的言及か内省的に記述しているかといった記述・報告の形態も対応が低く，多様な個人差があることも確認されたといえる。さらに，視覚的イメージ課題にも関わらず音（「サワサワと・鳥の声」など）や匂い（「森・葉っぱ・湿った土の匂い」など）が記述されるなど多様な情報チャンネルの関わりが確認された。以上により，視覚的な状況を思い描くという課題であっても多様な感覚モード・情報チャンネルが関

表２：体験内容チェックリスト

記述の出現度数	視線目線の移動・場所空間位置(a)	運動動作及びその形容(b)	感じる思うなど心的内容記述(c)	風や感触などへの言及(d)	声や音(e)	匂いや香り(f)	その他の形容(g)	無人への言及(h)	度　数	行　数	行当たり記述数
平均 (幅)	2.00 (0-4)	3.94 (0-9)	3.65 (0-10)	0.41 (0-2)	0.12 (0-1)	0.53 (0-6)	0.35 (0-3)	0.35 (0-1)	11.35	6.41 (3-10)	1.76
S.D.	1.32	2.33	3.27	0.71	0.33	1.50	0.78	0.49	5.35	2.03	0.49

わっていることが明らかになったと言える。

優先コミュニケーション・チャンネルのズレ

「青い湖・白いヨット」課題では，体験内容を自由に記述してもらうことによって，他者の優先感覚モードからの影響をできるだけ少なくなるように配慮していた。それにより被験者数の少なさにも関わらず多様な感覚モードが把握できたと思われる。それに対して，同課題を用いた他の予備的研究において「体験内容をカウンセリング的に問いかけて把握する」方式で行ったところ，聞き取る側の優先情報チャンネルにそって質問が行われる傾向が見いだされ，話者の優先情報チャンネルの把握というよりもむしろ，聞き手の優先情報チャンネルに沿った方向での偏向が際立ったことがあった。「どのような体験でしたか」といった質問には視覚・聴覚・体感などを指し示す語彙は入っていないが，「どう見えましたか」「どのように聞こえましたか」「どんなふうに感じましたか」といった感覚動詞による問いかけは，特定の感覚モードに限定された反応を無意識に想定してしまう。本来は，被験者が用いる感覚動詞的表現にまず気がついて，その感覚モードでの問いかけを行うことで本人の優先情報チャンネルを把握し，その後，本人の優先コミュニケーション・チャンネルへとメッセージを届けていくことによって本人の体験の詳細へ迫ることができたはずであった。

ところで，話者と聞き手との優先情報チャンネルおよび優先コミュニケーション・チャンネルのズレという問題は，他者理解を前提とする心理療法的な場面でも頻発しているといえる。たとえば，イギリスにおけるダンスムーブメント・サイコセラピー（dance movement psychotherapy）などにおいて用いられているオーセンティック・ムーブメント（authentic movement）という実践では，クライエントが目を閉じて身動きや姿勢の変化などを行い，それをセラピストが観察して事後の話し合いの中で身体心理療法的な展開を行っていく。そうした場面においても，体験者（ムーバー mover）と観察者（ウィトネス witness）とのやりとりに上述したような感覚モードのズレや優先チャンネルのズレがあることを体験することができた（2009年度イギリス Helen Payne 教授による Authentic Movement Workshop）。もちろん，優れたセラピストはそうしたズレの存在に気づき体験者の体験内容へと的確に迫っていくのに対して，観察者自身の感覚モードや優先チャンネルの枠に気がつかず，二者のコミュニケーションに齟齬を来している場合も見受けられた。

結論としては，M.エリクソンによるアプローチ以前にはその重要性がそれほど指摘されていなかった優先コミュニケーション・チャンネルおよび優先情報チャンネルであるが，「青い湖・白いヨット」課題において多様な感覚モードあるいは情報チャンネルが関わっていることが示された。今後は心理療法などの対話的関係における優先コミュニケーション・チャンネルとその食い違いについて，その重要性をあらためて認識する必要があるといえる。

文　献

（1）J. K. Zeig "Teaching Seminar with Milton H. Erickson" Brunner/Mazel Publishers, New York 1980／J. K. ゼイク「ミルトン・エリクソンの心理療法セミナー」成瀬悟策監訳，宮田敬一訳，星和書店，1984

（2）Richard Bandler and John Grinder "Frogs into Princes: Introduction to Neurolinguistic Programming" Eden Grove Editions, 1990／「あなたを変える神経言語プログラミング」酒井一夫訳，東京図書 1997

（3）M. Elich, R.W. Thompson & L. Miller "Mental imagery as revealed by eye movements and spoken predicates: A test of neurolinguistic programming" Journal of Counseling Psychology, 1985, 32(4), 622-625

（4）葛西俊治「面談時における優先コミュニケーション・チャンネルの基礎研究―関連性評定質的分析を用いて」日本人間性心理学会第29回大会発表論文集，2010，208-209

（5）葛西俊治「関連性評定質的分析による逐語録研究―その基本的な考え方と分析の実際」札幌学院大学人文学会紀要，2008，第83号，61-100

Psychological Significance of Predominant Communication Channel: A Study based on Relatedness Evaluation Qualitative Analysis

KASAI Toshiharu

Abstract

In his epoch-making hypnotherapy, Milton Erickson indicated the importance of nonverbal factors in conversation, concerning predominant sense modalities and predominant communication channels. The mental imagery task called "Blue lake and white yacht" about the diversity and individuality of predominant information channels showed the possibility of different predominant communication channels among people: Relatedness Evaluation Qualitative Analysis with Quantification Method Type III yielded four dimensions, such as 1) directness vs. indirectness of experienced contents, 2) non-visual vs. visual mode, 3) isolation vs. enclosedness, and 4) located self vs. inward thoughts. Discussion was made about the possibility of mismatched communication channels in talking because of multiform information channels.

Keywords: information channel, Erickson hypnosis,
Hayashi's Quantification Method Type III

（かさい　としはる　札幌学院大学人文学部教授　臨床心理学科）